

『ある閉ざされた雪の山荘で』

東野圭吾 著 講談社文庫 693円(税込)

気分転換にミステリー

会員 大瀧 佳孝 (70期)



● 執筆の端緒

2024年、年が明けて間もなく、同期の弁護士から、「バーターというわけでもないんですが、LIBRAの執筆をお願いします。本か映画の紹介を」と頼まれた。別件をお願いしたことを若干後悔しないわけでもなかったが、執筆することに。

ここでは、直近で読んだ中で印象に残っているミステリー小説をお薦めしたい。

ただ、種と仕掛けがミソなので、どこまで書いていいものか悩ましいところだが、本作品を手取るきっかけとなれば幸いである。

● 本作品について

著者はあの有名な東野圭吾氏。

年明けに映画化され話題となった作品だが、作品自体は意外と古く、手元の本書によると、第1刷発行は1996年となっている。

● 物語の概要

時期は早春、芝居のオーディションに合格した男女7人が、監督から、舞台稽古と称して、とある山荘での4日間の合宿を指示される。

山荘内の本棚には、アガサ・クリスティ「そして誰もいなくなった」等のミステリー小説が人数分用意されていた。

この時点で不穏ではあるが、各々が舞台稽古の意味を考えながら過ごす中、実際に仲間が一人また一人となくなっていく。

果たしてこれは本当に芝居なのか、実際に殺人事件が起きているのか。

そういった状況下で、いるかいないかも分からない犯人を捜す、というもの。

合宿の時期は早春ではあるものの、大雪というわけではない。そのため、よくある、「雪崩で外部との連絡がとれない!？」ということも当然ない。

また、山荘の目と鼻の先にはバス停があり、電話も繋がっているため、助けを呼ぼうと思えば呼べる環境ではある。

しかしながら、外部と接触した時点でオーディションの合格を取り消すという縛りから、擬似的な閉鎖空間を作り出している点が本作品の特徴だと思う。

なお、主人公は个性的で、万人受けはしない模様。

● 「お薦め」ポイント

なんといっても、殺人事件が起きているのか起きていないのかはっきりしない中で、監督の指示に従い舞台稽古に徹しようとするも、実際に事件が起きていれば稽古どころではない、次の被害者は自分かもしれない、という葛藤が、設定として新鮮だった。

また、本のボリューム（コンパクトさ）も魅力。

賛否あると思うが、ミステリーは、文章量が多い＝設定に手が込んでいる＝面白い、という先入観から、どちらかという厚めの本を手取るが多かった。映画化もあって本作品を読もうと、実物を手取ったときは、やはり本の薄さが気になった。

だが、これはこれでよかった。

むしろ、これくらいの厚さでも、読んでいて先が気になって仕方なかった。

結末についても、映画化されるだけあって、きれいに締めくくられていたと思う。

ミステリー作品に触れる度、自分なりに事件の真相を考えるようにはしているが、本作でもやはり見抜けなかった。ただ、作品を読みながら、時には立ち止まって、時にはちょっと戻って、色々考えることができるのは、映画とは違った本の良さだと思う。「これ事件化すると刑事手続はどうなるんだろう」と思いを馳せるのも、会員の皆様なら少なからずご理解いただけるはず。

● 最後に

本作品の映画の公式ウェブサイト、キャッチコピーがあったので紹介する。

「全員役者、全員容疑者。」「果たしてこれは演技か、事件か。」

長々書いたが、これに尽きる。

本作品を手取ると分かるが、本当に薄い。

でも面白い。サクッと読める。気分転換にぜひ。